

学部等	学科等	①大学・大学院の設置理念 ①学科・専攻の設置理念 ③認定を受けようとする課程の設置趣旨（学科等／免許校種ごと）	②教員養成に対する理念・構想（大学、大学院） ②教員養成に対する理念・構想（学科、専攻）
		成蹊大学大学院は、成蹊学園建学の精神に基づき、学術の理論及び応用を教授研究し、その深奥を究めて文化の進展に寄与すること及び高度の専門性が求められる職業を担うための深い学識及び卓越した能力を培うことを目的とする。	成蹊大学大学院においては、設置する博士前期課程の4研究科8専攻のすべてで専修免許状が取得できる教職課程を設置している。それぞれの研究科専攻の基礎となる大学学部等の課程では「広い視野を持ち、高度の専門的知識・技能、科学的研究精神を身につけ、理論的考察力においても実践的教育活動においても、生徒・保護者ばかりでなく、日本国民や世界の人々の期待に応えて活躍できる教師を育成する」目的で教職課程を設置している。大学院研究科の課程においては、これに加えて、学部と大学院の継続性を考慮した教育の実践と教育研究過程においての様々な経験を通し、専門分野の深い知識と、隣接分野、学際的な分野の学修により得ることを目標としている。これにより、現代の知識基盤社会を支える広い知的素養を兼ね備えることで、教育者としての広い視野と確固たる倫理観をもち、生徒をしっかり指導・支援できる能力を培う教員の育成を目指している。これらの能力・知識・技能・使命感と教職の力量を兼ね備え、教員として父母や生徒に柔軟に対応でき、日本国内のみならず国際社会に通用する人材の養成を構想している。
文学研究科	社会文化論専攻	<p> 念「①大学の「①設置理念」「②教員養成」に対する理念・構想」 学科等の「①設置理念」「②教員養成」に対する理念・構想」 </p> <p> ■文学研究科の理念、目的 本研究科は、言語、文学、歴史、思想等に関わる伝統文化を継承しながら、新たな知見を生み出して社会に寄与することを基本理念としている。教育研究上の目的は人間と社会に対する広範な理解および探究心と、高度な専門知識と能力を持った専門職業人や広く深い専門的素養を身につけた人材、ならびに問題を発見し追究する能力に富み、学問的創造性を発揮しうる優れた学術研究者の育成である。 ■社会文化論専攻の教育研究上の目的（人材育成方針） ア 研究コース 歴史学、文化人類学、国際関係研究、地域研究、比較文化研究、社会学、メディア研究等の研究領域のうち選択する分野において、創造性豊かな優れた研究活動を行っていくために必要とする専門的な知識の修得、研究能力の養成及び分野を横断した幅広い視野の涵養を目的とする。 イ 総合コース 歴史学、文化人類学、国際関係研究、地域研究、比較文化研究、社会学、メディア研究等の研究領域に関し、専門的知識を備え、それを実践的活動へ導く能力を有する高度な専門職業人及び広い知的素養を備えた人材の養成を目的とする。 </p> <p> ■ディプロマ・ポリシー【略】 </p> <p> ○中学校専修免許状（社会） 社会文化論専攻（以下、本専攻）においても、「豊かな人間性をもち生徒を惹きつける個性的な魅力をもつ資質・力量の高い教員」の養成をめざしている。そのためには教職および教育内容に関する深い教養と教育的技能をもち、高度な専門知識・技能を兼ね備えた人材の養成が重要であると考え。特に後者に関しては、（1）専門的な科目の中でも科目区分「一般研究科目」として文化研究、文化人類学、歴史学、ジェンダー・女性学、社会学、メディア研究、地域福祉・NPO研究の基盤的な科目を配置し、多様な学問領域を踏まえた研究を遂行する能力を養成する、（2）科目区分「特殊研究科目」として文化研究、文化人類学、歴史学、ジェンダー・女性学、社会学、メディア研究、地域福祉・NPO研究のより応用的な科目を配置し、知的フロンティアの最前線を開発していく能力を養成する、（3）全ての学年に年間を通した論文演習科目ないし課題研究科目を設けることで、多角的な視点から物事をとらえたり、自ら主体的に問題を発見して、解決法を考案し、必要な手段を企画したりする能力を涵養することや専門分野の学習をより深めることなどについて、段階を追ってより発展的にきめの細かい教育を行う教育課程を編成している。以上の教育課程の編成方針は（1）日本、南北アメリカ、アジア、アフリカ等の広範な地域の社会と文化を対象として社会・文化状況を的確に分析する能力を磨き、洞察力を培うこと、（2）歴史学、文化人類学、国際関係論、社会学、メディア研究など人文・社会科学の幅広い分野から研究を進めると同時に、各学問分野の個別のアプローチを土台として、その上に創発的で超域的な発想と展望を重ねること、（3）情報分析能力や豊かな国際感覚を身につけることによって、国際化や情報化に迅速に対応できる能力を養うこと、また、適応力や判断力の涵養を図ることと密接な関わりをもつ。この編成方針によって、国際社会のなかで自らの社会や文化にたいする特色への理解と認識を深めることのできる教員を養成する。このような人材の養成は、中学校「社会」の学習指導要領の教科の目標である「広い視野に立って、社会に対する関心を高め、諸資料に基づいて多面的・多角的に考察し、我が国の国土と歴史に対する理解と愛情を深め、公民としての基礎的教養を培い、国際社会に生きる平和で民主的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養う。」に応える教員の養成に通じる。大学としての本学の教職課程の設置趣旨に述べられた本学の特性をいかしながら、上記のような人物を我が国の学校教育界に貢献できる教員として送り出すことによって、本専攻としての社会的責任を果たしたい。これが本専攻において中学校「社会」の教職課程を設置する趣旨である。 </p> <p> ○高等学校専修免許状（地理歴史） 社会文化論専攻（以下、本専攻）においても、「豊かな人間性をもち生徒を惹きつける個性的な魅力をもつ資質・力量の高い教員」の養成をめざしている。そのためには教職および教育内容に関する深い教養と教育的技能をもち、高度な専門知識・技能を兼ね備えた人材の養成が重要であると考え。特に後者に関しては、（1）専門的な科目の中でも科目区分「一般研究科目」として文化研究、文化人類学、歴史学、ジェンダー・女性学、社会学、メディア研究、地域福祉・NPO研究の基盤的な科目を配置し、多様な学問領域を踏まえた研究を遂行する能力を養成する、（2）科目区分「特殊研究科目」として文化研究、文化人類学、歴史学、ジェンダー・女性学、社会学、メディア研究、地域福祉・NPO研究のより応用的な科目を配置し、知的フロンティアの最前線を開発していく能力を養成する、（3）全ての学年に年間を通した論文演習科目ないし課題研究科目を設けることで、多角的な視点から物事をとらえたり、自ら主体的に問題を発見して、解決法を考案し、必要な手段を企画したりする能力を涵養することや専門分野の学習をより深めることなどについて、段階を追ってより発展的にきめの細かい教育を行う教育課程を編成している。以上の教育課程の編成方針は（1）日本、南北アメリカ、アジア、アフリカ等の広範な地域の社会と文化を対象として社会・文化状況を的確に分析する能力を磨き、洞察力を培うこと、（2）歴史学、文化人類学、国際関係論、社会学、メディア研究など人文・社会科学の幅広い分野から研究を進めると同時に、各学問分野の個別のアプローチを土台として、その上に創発的で超域的な発想と展望を重ねること、（3）情報分析能力や豊かな国際感覚を身につけることによって、国際化や情報化に迅速に対応できる能力を養うこと、また、適応力や判断力の涵養を図ることと密接な関わりをもつ。この編成方針によって、自らが世界の歴史的過程を踏まえた社会や生活・文化の地域的特色について、理解と認識を深めることのできる教員を養成する。このような人材の養成は、高等学校「地理歴史」の学習指導要領の教科の目標である「我が国及び世界の形成の歴史的過程と生活・文化の地域的特色についての理解と認識を深め、国際社会に主体的に生き平和で民主的な国家・社会を形成する日本国民として必要な自覚と資質」に応える教員の養成に通じる。大学としての本学の教職課程の設置趣旨に述べられた本学の特性をいかしながら、上記のような人物を我が国の学校教育界に貢献できる教員として送り出すことによって、本専攻としての社会的責任を果たしたい。これが本専攻において中学校「社会」の教職課程を設置する趣旨である。 </p> <p> ○高等学校専修免許状（公民） 社会文化論専攻（以下、本専攻）においても、「豊かな人間性をもち生徒を惹きつける個性的な魅力をもつ資質・力量の高い教員」の養成をめざしている。そのためには教職および教育内容に関する深い教養と教育的技能をもち、高度な専門知識・技能を兼ね備えた人材の養成が重要であると考え。特に後者に関しては、（1）専門的な科目の中でも科目区分「一般研究科目」として文化研究、文化人類学、歴史学、ジェンダー・女性学、社会学、メディア研究、地域福祉・NPO研究の基盤的な科目を配置し、多様な学問領域を踏まえた研究を遂行する能力を養成する、（2）科目区分「特殊研究科目」として文化研究、文化人類学、歴史学、ジェンダー・女性学、社会学、メディア研究、地域福祉・NPO研究のより応用的な科目を配置し、知的フロンティアの最前線を開発していく能力を養成する、（3）全ての学年に年間を通した論文演習科目ないし課題研究科目を設けることで、多角的な視点から物事をとらえたり、自ら主体的に問題を発見して、解決法を考案し、必要な手段を企画したりする能力を涵養することや専門分野の学習をより深めることなどについて、段階を追ってより発展的にきめの細かい教育を行う教育課程を編成している。以上の教育課程の編成方針は（1）日本、南北アメリカ、アジア、アフリカ等の広範な地域の社会と文化を対象として社会・文化状況を的確に分析する能力を磨き、洞察力を培うこと、（2）歴史学、文化人類学、国際関係論、社会学、メディア研究など人文・社会科学の幅広い分野から研究を進めると同時に、各学問分野の個別のアプローチを土台として、その上に創発的で超域的な発想と展望を重ねること、（3）情報分析能力や豊かな国際感覚を身につけることによって、国際化や情報化に迅速に対応できる能力を養うこと、また、適応力や判断力の涵養を図ることと密接な関わりをもつ。この編成方針によって、現代社会について主体的に考察し、人間としての在り方生き方を自覚的に考えさせることのできる教員を養成する。このような人材の養成は、高等学校「公民」の学習指導要領の教科の目標である「広い視野に立って、現代の社会について主体的に考察させ、理解を深めさせるとともに、人間としての在り方生き方についての自覚を育て、平和で民主的な国家・社会の有為な形成者として必要な公民としての資質を養う。」に応える教員の養成に通じる。大学としての本学の教職課程の設置趣旨に述べられた本学の特性をいかしながら、上記のような人物を我が国の学校教育界に貢献できる教員として送り出すことによって、大学院経済経営研究科経済学専攻としての社会的責任を果たしたい。これが本専攻において高等学校「公民」の教職課程を設置する趣旨である。 </p>	<p> 社会文化論専攻（以下、本専攻）は日本、南北アメリカ、アジア、アフリカ等の広範な地域の社会と文化を対象として、歴史学、文化人類学、国際関係論、社会学、メディア研究など人文・社会科学の幅広い分野から研究を進めると同時に、各学問分野の個別のアプローチを土台として、その上に創発的で超域的な発想と展望を重ねることによって、グローバル化する現代世界に対応できる柔軟かつ生産的な社会・文化理解の地平を切り拓いてゆくことをめざしている。したがって本専攻が院生に求めるところは、世界に関する既存の知識を広く深く獲得するだけでなく、いまだ遭遇したことのない新たな事態に直面したときにもひるまずに対応できるような独自の判断能力と柔軟な認識能力の開発だということになる。こうした能力は本専攻が博士前期課程に設置している「研究コース」と「総合コース」という二つのコースにともに求められるものではあるが、将来の研究者を養成する前者のコースよりも、むしろ次世代の若者、特に中学生や高校生の育成を担う教員の養成を念頭に置いた後者のコースに、より実践的に求められる。本専攻が「総合コース」を設置した目的は、専門的知識を備え、それを実践的活動へ導く能力を有する高度な専門職業人および広い知的素養を備えた人材の養成であるが、市民や企業人のみならず、すでに教育現場にいる教員やより高度な知識を備えた教員を目指す学生の学習・研究活動を想定している。専修免許の取得を希望するそうした高レベルの教員こそ、本専攻の上記の基本理念を具体的に実現し、社会に還元し、次世代に受け渡してゆくのにふさわしい必要不可欠な人材なのである。このような趣旨を具現化するため、本専攻は1年次に履修することが望ましい教科に関する科目として64科目もの多くの地域と分野にかかわる科目を配し、広い視野と多面的な考察および国際社会における主体的な生き方の構築という中学校（社会）、高等学校（地理・歴史・公民）の免許に求められる条件を十分に満たすことができるようにしている。また独自の判断能力と柔軟な認識能力の開発という本専攻の教育目標を成就するために、各科目をできるだけ少人数で行うことを旨とし、一方的な受け身の授業でなく、主体的に参加できる対話的授業を実現している。しかし目指すところの独自の判断とは往々にして独善や独りよがりになりやすいので、そうした弊害を避けるため、特に演習系の科目において教員と院生のあいだ、あるいは院生間の討議を中心軸に据えて、他者との対話による判断と認識の涵養を実現している。そのようなプロセスの主体的な成果として、2年次に修士論文（研究コース）あるいは特定課題研究の成果（総合コース）の作成を課している。 </p>

3. 課程認定を受けている課程を有する学科等の各段階における到達目標

＜文学研究科社会文化論専攻＞（認定課程：中専修免（社会））

履修年次		到達目標
年次	時期	
1年次	前期	学部で身につけた知識をさらに深化させるべく、多彩な科目の中から各自の立てた研究計画に沿いながらも狭い分野に偏ることなく科目を履修し、教科の専門知識の肉付けを2年間にわたって行い、地域・分野を横断した多角的・多面的な発想を会得することを目標とする。
	後期	前期同様に多彩な科目を履修し、次年度の成果作成の準備をするとともに、教科の専門知識をさらに深めるために幅広い知見を得ることを目標とする。
2年次	前期	1年次の履修の成果を土台として、テーマと研究方針を策定し、修士論文（研究コース）または特定課題研究の成果（総合コース）の執筆に向けた「論文演習」または「課題研究」を履修し、担当教員や他の大学院生との建設的な討議を通じて、自分の考えの独善性を修正するとともに、よりバランスのとれた知見を形成することを目標とする。
	後期	これまで培った専門知識を土台として、策定したテーマと研究方針にしたがって、修士論文または特定課題研究の成果を完成させることを目標とする。

3. 課程認定を受けている課程を有する学科等の各段階における到達目標

<文学研究科社会文化論専攻> (認定課程：高専修免(地理歴史))

履修年次		到達目標
年次	時期	
1年次	前期	学部で身につけた知識をさらに深化させるべく、多彩な科目の中から各自の立てた研究計画に沿いながらも狭い分野に偏ることなく科目を履修し、教科の専門知識の肉付けを2年間にわたって行い、地域・分野を横断した多角的・多面的な発想を会得することを目標とする。
	後期	前期同様に多彩な科目を履修し、次年度の成果作成の準備をするとともに、教科の専門知識をさらに深めるために幅広い知見を得ることを目標とする。
2年次	前期	1年次の履修の成果を土台として、テーマと研究方針を策定し、修士論文(研究コース)または特定課題研究の成果(総合コース)の執筆に向けた「論文演習」または「課題研究」を履修し、担当教員や他の大学院生との建設的な討議を通じて、自分の考えの独善性を修正するとともに、よりバランスのとれた知見を形成することを目標とする。
	後期	これまで培った専門知識を土台として、策定したテーマと研究方針にしたがって、修士論文または特定課題研究の成果を完成させることを目標とする。

3. 課程認定を受けている課程を有する学科等の各段階における到達目標

＜文学研究科社会文化論専攻＞（認定課程：高専修免（公民））

履修年次		到達目標
年次	時期	
1年次	前期	学部で身につけた知識をさらに深化させるべく、多彩な科目の中から各自の立てた研究計画に沿いながらも狭い分野に偏ることなく科目を履修し、教科の専門知識の肉付けを2年間にわたって行い、地域・分野を横断した多角的・多面的な発想を会得することを目標とする。
	後期	前期同様に多彩な科目を履修し、次年度の成果作成の準備をするとともに、教科の専門知識をさらに深めるために幅広い知見を得ることを目標とする。
2年次	前期	1年次の履修の成果を土台として、テーマと研究方針を策定し、修士論文（研究コース）または特定課題研究の成果（総合コース）の執筆に向けた「論文演習」または「課題研究」を履修し、担当教員や他の大学院生との建設的な討議を通じて、自分の考えの独善性を修正するとともに、よりバランスのとれた知見を形成することを目標とする。
	後期	これまで培った専門知識を土台として、策定したテーマと研究方針にしたがって、修士論文または特定課題研究の成果を完成させることを目標とする。